



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雑報. 地球 1933, 19(4): 321-326

ISSUE DATE:

1933-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184152>

RIGHT:

ない。次に方圖で、世界地圖萬國人物屏風、同じく日本地圖萬國人物屏風、萬國繪圖肉筆の三點いづれも珍らしい。立派な美本として推賞したい。(藤川)

## 雜報

### ○圖版第四版説明

#### 第一信濃青木湖

聯珠形をなして安曇平の北端に連なる仁科三湖の北端を占める靈湖。日本の地質學が開かれた曉からその名地學者間に膾炙してゐる。最近小川名譽教授が中央日本に於ける氷河問題の端緒を得られたのもこの附近で、湖面北岸に低く左右に連なる丘陵は堆石丘であるとせられた。左の急斜面は仁科山脈の一部で、カールの地形がその頭部に存在する。遙か雲表に白馬岳の雄姿を仰ぎ、清澄幽邃の仙境である。

#### 第二信濃松原湖畔禰山

千曲川の上流、南佐久郡松原湖西岸の禰山。圖版に見る如く金山すべて安山岩の大塊から成り、ベンクの所謂岩塊堆石らしい。記事は本誌本卷第三號の小川名譽教授報文に詳しい。岩塊の大きさは中央左よりの人物と比較せられたい。

#### 第三信濃小縣郡武石村大安山岩塊

武石村から北西へ入る谷の中には安山岩の大塊が轉々してゐる。附近は第三紀層の綠色凝灰岩のみから成つて初めは礫

の由來に付て甚だ面喰ふ。谷をさかのぼること山背に(ノダツバラ)岩山安の礫のみから成る地層に出會つて疑問は先づ氷解するが、圖版に見える様な人身二倍大の大礫が如何なる營力で運搬し來られたか。小川名譽教授は之に氷河營力の説明を與へられた。因にこの安山岩はこの地點から約二十軒離れた美ヶ原の熔岩と同一である。

### ○除虫菊とアルジエンチン

アルジエンチンは農牧國にして下水工事不十分なるため、都市と雖も蠅多く郊外に近きは蚊其他の虫類多し、従つて一般に殺虫除虫剤の需要尠からず、野菜花卉其他の農作物又は牧羊等に使用する此種藥品の需要多し、従つて右の製剤の原料輸入多き由なるも、製造行程は嚴秘にして調査困難なり、しかし本邦産除虫菊の輸入は増加の傾向にて粉類は過去三年間の統計によれば約二十倍の躍進にて第二位の輸入高となつた。

#### 除虫菊液及煉物輸入高

一九二八年	一七、七〇〇近	三、二二五
一九二九年	一三、九〇〇近	二、七〇五
一九三〇年	一、四、四、四〇	二、七、六五九
一九三一年	一、四、四、四〇	二、三、四〇〇
同線香類		
一九二八年	一、七、九三	二、六六三
一九二九年	六、六〇四	一〇、五八
一九三〇年	五、九四〇	九、四四

一九三一年	七〇、七〇	一一、二〇
同 粉		
一九二八年	八九、〇六	七五、五〇
一九二九年	七〇、八八	五八、七五
一九三〇年	九四、五〇	八〇、八二
一九三一年	一一、四三	五八、九八

これを國別輸入にみると、日本からは

一九二八年 一九三〇年

除虫菊の液の煉物 七〇、八八 五八、七五

同 線 香 類 三、九〇、八二 六、七五、八二

同 粉 一、〇六、一 六、七五、八二

合 計 一三、五八、一 二四、四三、五

二萬四千ペソ内外にしか達しない。日本品の強敵は北米合衆國産にして、我敢取線香に對して米國産除虫菊の粉と石油及香油にて調劑せるフリットと稱する液體がある、鋤入のもの、散布器具の圓筒のポンプ式棒を引きて液を入れ、これを押して筒先より噴霧せしむるもので、現に我國にも類似品の發賣がある、但し同國では、米國スタンダード石油會社ブエノスアイレス工場で之を製造して盛に用ひられてゐるのである。

## ○除虫菊の殺虫素

家庭用除虫劑が一九一九年始めて市場に紹介された時分は、除虫菊そのものゝ中に含有する殺虫素の分量も又其の化學的性質もよく知られて居なかつたが、一九二九年には花の種類により殺虫素の量がちがふこと、除

虫菊の殺虫素はピリトリン含有の多少によることが明になつた。

當時まではダルマシアの未開花が原料として好適なものとされて居たが、同年に日本産の花がダルマシアのものよりも優良で花が開くに從つてピリトリンの含有量が増進するといふ事が知られ、日本産の花は〇・五八一—一・一一%の Pyrethrin を含有して居ることが發見されたのである、最も日本の出荷人はピリトリンの含有量について保證を與へないの例であつて、買手側は其含有量の多少を確知することなしに買入れるのであるから、自然賣手には不利な條件が付せられると云ふ譯である、米國の某製造會社は本邦に試験所を設立し、内地で仕入れた除虫菊のピリトリンを分析してゐる由であるがそれは賣手より〇・九〇%含有保證附で納入した花につき、米國へ出荷前に検査するためであるといはれる、但し除虫菊は貯藏して居る間にピリトリン含有分を失ふと云ふことが判つた、從つて收穫期を過ぎて後の検査では右の擧げた〇・九〇%以上の含有量を有する花は減少して行くものである。

ピリトリンは粘着性のある液體で、ペトロリウム・エーテル、アルコール、アセトン Ethylene dichloride 其他概收の有機溶媒には溶解するものである、さうして右にあげた最後のもを溶媒としたものが、除虫菊の各種方面の要求に合致するといはれる、英國では目下この式による製法の特許權が申請中であるといふことである。

○享保以後の地理關係出版書目 大阪 (六)

書名

作者

板元

出願

攝州大坂 目標山勝景一覽 一冊  
安治川口 新刊申出

八島五岳(東都)

鹽屋治兵衛(生玉社地)  
右板元よりの申出でと本屋  
行司篤組にて聞届け板行

天保六年正月十一日

攝州大坂 目印山細見圖 一枚摺  
安治川口 新板發行申出

秋田城右衛門(道官町)

鹽屋治兵衛(生玉社地)  
右板元よりの申出でと本屋  
行司篤組にて聞届け板行

天保六年正月十一日

改攝州大坂圖 再刻發行申出

播磨屋九兵衛

右板元よりの申出でと本屋  
行司慎組にて聞届け板行

天保六年三月廿日

目標山名所圖會 二冊

和泉屋彌四郎(博勞町)

鹽屋治兵衛(生玉社地)

天保六年五月  
天保六年五月十四日

攝津國大繪圖 一帖

蘆屋仙三(立賣堀一丁目)

河内屋喜兵衛(北久太郎町五丁目)

天保六年六月  
天保七年二月

增補日本海陸細見記 折本 一冊  
日本海陸記 折本 一冊  
右兩書は以前「日本海陸兩道中獨案内」と題せし  
ものゝ抜摺なるが此度兩書とし改題發行申出

秋田屋良助

右板元よりの申出でと本屋  
行司慎組にて聞届け板行

天保六年九月十一日

日本海陸案内記

以前増補日本海陸細見記」と題せしも  
のゝ中より抜摺し此度改題板行申出

秋田屋良助

右同人  
右板元よりの申出でと本屋  
行司にて聞届け板行

天保六年十二月五日

浪華一覽圖 一枚摺

瀧澤健藏(北野村)

河内屋吉兵衛(南本町五丁目)

天保七年二月

【附記】本書板行の義用願したるが同年三月十九日に至り願ひ下げとなる。

大日増補海陸行程細見記

稻富中右衛門(泉州信達)

秋田屋良助(九之助町一丁目)

天保七年二月  
天保七年八月十八日

日本海陸通覽 折本 一冊

本書は以前吉文字屋市兵衛所有の板本なりしが此度秋田屋良助方に於て道  
中記諸株を買請けたるを以て其旨申出でしにより本屋行司にて聞届け置く

天保七年二月

○陸地測量部出版地圖目錄(四)

(昭和七年十二月二十五日出版)

滿洲十萬分一圖 新版

三姓

七號

祥順山

一面

同

十二號

蘭西

一面

同

八號

大羅勒密

一面

同

十三號

對青山

一面

同

十二號

三站

一面

同

十四號

雙城堡

一面

同

十三號

通河縣

一面

同

十五號

珠爾山

一面

同

十五號

亮珠河

一面

同

十七號

滿東

一面

同

十七號

老石房

一面

同

十八號

肇東

一面

同

十八號

木蘭縣

一面

同

十九號

集廠子

一面

同

二十號

一面坡

一面

同

二十號

昇平鎮

一面

同

二十二號

石頭河子

一面

同

二十二號

小城子

一面

同

二十三號

柵板站

一面

同

三號

大蛟河

一面

同

二十四號

黑龍宮

一面

同

四號

杉松街

一面

同

二十五號

烏吉密河

一面

同

五號

溪浪河

一面

哈爾濱

二號

巴彥

一面

同

八號

吉林

一面

同

三號

賓縣

一面

同

九號

旺起屯

一面

同

四號

二層甸子

一面

同

十號

弓棚子

一面

同

五號

五常堡

一面

同

十一號

秀水甸子

一面

同

七號

康金井

一面

同

十二號

烏拉街

一面

同

八號

哈爾濱

一面

同

十三號

大水河

一面

同

九號

阿什河

一面

同

十四號

雙河鎮街

一面

同

十號

拉林鎮

一面

同

十五號

五家站

一面